

スペイン艦隊のイギリス遠征

——メディナ・シドニア公は臆病者か？——

岩 根 圀 和

I.

リスボンのテジョ河口を1588年5月28日に出撃したスペイン艦隊は総勢130艘、乗員は水夫と兵士あわせて約3万であった。風は運ぶのに疲れ、海も支えるのに呻吟するほどの大艦隊である。それからほぼ3ヶ月後にコルーニャからサンタンデルへかけて帰還した艦船は65艘、人員は2万強。ほぼ半数の艦船を失い1万名が命を落としたのである¹⁾。無事帰還した者もほとんどが壊血病、チフス、赤痢に罹患してそのまま船の上で息絶える者や陸地におりて倒れる者が後を絶たなかった。僚船同士の衝突事故やイギリス艦隊との戦闘で失った船は5艘余り、残る125艘がいっせいにスペインを目指して帰還の途についた8月10日からの航程は、総司令官メディナ・シドニア公にとって悪夢の2ヶ月であった。イギリス海峡での戦闘を経てカレー沖からグラベリーヌ沖にかけての激戦、そしてフランドルの浅瀬に座礁する恐怖を危機一髪のところまで回避して北海へ抜けた。イギリス艦隊ドレイク、ハウードの追尾をしり目にスコットランド先端を西に折れてやがてアイルランドの岩礁を左舷にかすめてひたすら南下の針路を保ち、嵐に吹き寄せられるようにしてスペイン沿岸へ辿り着いたのだった。北海からアイルランドの航海は、

ほとんどの水夫にとって未知の荒海であった。

初めは編成を組んでいた艦隊もスコットランドを西へ回る頃には足並みの乱れが目立ち始め、嵐に襲われて5艘、10艘の小さな分隊へと自ずから分かれていった。イギリス海峡を整然と東進してハワード提督を愕然とさせた三日月形編隊の偉容はすでにその片鱗もなく、もはや総司令官の指揮権の及ぶ範囲を越えて分散してしまっていた。「各船はそれぞれに帰還の努力をされたし、各々の奮闘と幸運を祈る」と突き放したようなメディナ・シドニア公の言葉も無理はない、絶えず激戦の中心にいた総旗艦「サン・マルティン」にしてからが砲弾の被害に加えて食料不足、飲料水の欠乏、病人の続出そして何よりも恐ろしいことに砲弾の貫通孔からの浸水がとまらずに沈没の危機に喘いでいたのである。メディナ・シドニア公自身も腹痛と下痢に襲われて体力を消耗して起きあがれない。なぜなら食べる物は黴の生えたビスケットがかるうじて残っているだけ、水はどろりと緑色を帯びて腐敗していた。雨水をすすり、革具を嚙って飢えと渴きをしのいでいるものの、ほとんどが病人ばかり。総旗艦にしてこの状態であれば他の艦船の惨状は想像してあまりある。「サン・マルティン」に縦走していた艦船が嵐に翻弄され、絶えきれなくなって1艘また1艘と姿を消していくが、メディナ・シドニア公には為す術がなかった。どの船も自身の問題を抱えて呻吟している。あとはそれぞれが裁量と才覚をもって無事にスペインへ帰還してくれることを願うばかりである。それでも不思議と命ながらえて「サン・マルティン」はサンタンデル港へ辿り着いた。カトリックの信仰に篤いメディナ・シドニア公はこれを神の恵みと言うが、文字通り言うようにして息も絶えだえに到着したのであった。続いて到着する僚船のなかには、せっかく港へ着いても操船する人手が無く、そのまま浅瀬に乗り上げたり岸壁に激突して沈没する船もあった。飢え死にあるいは病死して冷たい

大西洋の荒海へ放り込まれた人間のほうがむしろ幸せだと思わせる惨状であった。

スペイン艦隊帰還の報に全土は沸き返った。しかし矢よりも早く地方へ伝えられた目撃情報は、あの大艦隊がまるで幽霊船の惨状を呈した船団に落ちぶれ、上陸したひとびとがばたばたと死んでいく現実であった。裸同然の兵士や水夫が港の街路に行き倒れている。船を調べてみると異臭を放つ甲板には動けない病人やすでに冷たくなった骸が方々ころがっていた。総旗艦「サン・マルティン」では180名が病没。航海士（パイロット）4人のうち3人が死亡。腐敗した水と栄養不良から乗員はすべてチフスカ伝染病に罹病しており、メディナ・シドニア公の執事60人のうちほとんどが死亡、動けるのは2名のみであった。メディナ・シドニア公自身も20日に及ぶ熱と下痢に苦しめられ、サンタンデルへ着いたときは起きあがる体力もなく、担架で上陸してそのまま治療院へ運び込まれる状態であった。総旗艦にしてこれであるから他の艦船の惨状には凄まじいものがあった。

II.

リスボン河口を埋め尽くしたスペイン国民の期待を一身に担って出撃していった大艦隊が²⁾、数を半分に減らし、幽霊船のようになって戻ってきた。スペインが総力を挙げて結集し、イギリスの異端者エリザベスを懲らしめるため意気揚々と出撃していった大艦隊である。勝利の吉報を待ちわびていた国民の間に驚愕が走り、イギリスの報復を恐れて不安のどん底に突き落とされたのも無理はない。カトリックの神から祝福を受けた「いとめでたき艦隊³⁾」のはずがこれはどうしたことか。原因はどこにあるのか。その責任を問うのなら国王フェリペ2世、フランド

ル総督パルマ公そして艦隊総司令官メディナ・シドニア公の順になるのだろう。だがフェリペ2世の権威は絶対であり、また庶民がそれを非難弾劾するにはあまりに遠くあって顔の見えない存在であった。パルマ公の存在にしても、はるかフランドルにあってなじみがない。もっとも身近な艦隊総司令官メディナ・シドニア公へ水兵や兵士の不満の矛先が向かうのは道理である。しかし130艘、3万に近い乗員を抱える大艦隊であれば、士官たちにしてからがメディナ・シドニア公の警咳に接したことの無い者がほとんどであり、水夫・兵士に至っては総司令官の顔も見ただことのないのが普通であった。小柄で痩せ形、38歳、眼光は鋭いが穏やかな容貌の人物を見かけたとしてもそれが総司令官メディナ・シドニア公と気づかずにすれ違ったかも知れない。そもそも兵士たちは艦隊がイギリス海峡へ向かうことを知らされていないかった。アンダルシアを中心に施行された水夫、兵員の徴募は、新大陸へ向かう船団の触れ込みだったのである。そのほうが人員が集まりやすいだろうからとのフェリペ2世からの指示があった。嵐に遭遇してコルーニャへ入港した時点でさすがに新大陸を目指しているのではないと分かったが、艦隊の正確な目的地がメディナ・シドニア公から公表されたのはなんとイギリス海峡へ入ってからであったと言う⁴⁾。

遠征失敗の原因のひとつに総司令官メディナ・シドニア公の作戦上の責任があったかも知れない。しかしもっと根本的な原因を問うならフェリペ2世の机上の作戦とパルマ公の非協力こそがまず検証されなければならぬだろう。総司令官があれだけの大艦隊を動かすのに戦術を過ることがあったとしても、少なくとも無能な臆病者でなかった。メディナ・シドニア公の指揮にそのような非難に値する言動はどこにも認められないのである。作戦の真実を知らない末端の兵士、水夫の中には上陸後にその種のことを言う者があったかも知れないが、それは根拠のない

憶測、流言のたぐいに過ぎなかった。メディナ・シドニア公と接していた士官たちのどこからも総司令官を臆病者と誹る声は聞こえてこないし、もちろんそのような報告記録も見あたらないのである。しかるにここにメディナ・シドニア公を無能な臆病者と臆面もなく罵って庶民を煽動する者がひとりいる。ドミニコ会士ファン・デ・ビクトリア神父である。神父の43章に渡る覚え書きは事実の記述が多少前後しており、しかも反復が見られるので時間の流れにそって並べ直して抜粋してみるとメディナ・シドニア公を執拗に非難する要点は6つにまとめられる⁵⁾。

Ⅲ.

1) プリマス攻撃

7月30日から31日にかけてスペイン艦隊がプリマス沖へさしかかったときメディナ・シドニア公はこれを攻撃しなかった。それを次のように批判している。「プリマスには人員も弾薬も不足で、火縄銃を取る者もおらず、ドレイクが40艘ほどを指揮しているが日にちがたてばもっと増えるだろうと分かった。レイバ、レカルデ、オケンドその他の意見はこの港を占拠して40艘を拿捕することだった。簡単に見えたのにメディナ・シドニア公はみんなの意志に反してそのまま先へ進むことを命令した。」また言うには「私の知る限りでは、メディナ・シドニア公は非難を免れない。敵を壊滅させイギリスを占拠できる明らかな機会に、熟練した司令官たちが真実を述べているのを拒否したからである。・・・(ハワード)提督とドレイクはプリマスに40艘たらずでいた。それを拿捕できたと兵士たちは言う。敵の勢力を削ぐことができるのにその機会を生かさなかった。」

事実はビクトリア神父の言うほど簡単であったかどうか極めて疑問である。30日にスペイン艦隊はリザード岬を望む位置から14レグア（約78km）先のプリマスへ向かって西の微風に乗って航進を続けていた。敵大艦隊出現の急を知らせる狼煙がイギリス沿岸にしきりと上がっているのが見える。メディナ・シドニア公はこのとき総旗艦「サン・マルティン」船上に司令官を招集して作戦会議を開いた。プリマスを攻撃すべきか否かの議論である。総旗艦のバネガス艦長の記録によれば、敵の不意についてプリマス港へ突入して攻撃を仕掛けるべきだと歴戦の強者たちは主張した。ミラノ騎兵隊総司令官マルティネス・デ・レイバ、ビスケー艦隊司令長官マルティネス・デ・レカルデ、ギブスコア艦隊司令長官ミゲル・デ・オケンドなどの錚々たる人物たちである。これに対してメディナ・シドニア公はふたつの難点を述べた。ひとつはプリマス港の入り口には浅瀬があるので正面からの入港ができない現実である。狭い水道を2艘、3艘と通過することになるので両脇の城塞から狙い撃ちにされる。港内にいる敵艦隊は陸地に守られて動かずにいるだろうからこちらの攻撃はさほどの効果を期待できない。未知の港に多数の艦船がなだれ込めば操船が難しい。しかも陸風が吹かない限り艦隊は引き潮になるまで港を出られなくなる恐れがある。この危険性については司令官たちも納得した。

いまひとつにはフェリペ2世からの厳命があった。スペイン艦隊の任務は、ひたすらイギリス海峡を東進してマーゲイト岬（ドーバーの北）付近に一刻も早く到着し、そこで海峡を渡ってくるパルマ公の軍勢と合流し、テムズ河口から本土へ2万以上の兵士を上陸させて一気にロンドンへ攻め込んでエリザベスの身柄を確保する。こうしてイギリスをスペイン王室の支配下に置くことであった。フェリペ2世がエスコリアル宮の執務室で日夜、呻吟の末に考え出した作戦がこれであり、そのために

は途中で無用な戦闘を行って戦力を浪費することなくれぐれもお願いすると繰り返しメディナ・シドニア公へ下達しているのである⁶⁾。このふたつの理由から、プリマス攻撃を主張した司令官たちも了承のうえで攻撃作戦は却下された。フェリペ2世の命令に反する以上、メディナ・シドニア公としてはプリマスに突入を命ずることのできない立場にあったのは確かである。しかしビクトリア神父の言う「みんなの意志に反してそのまま先へ進むことを命令した」のは明らかに事実と一致していない。

スペイン艦隊を通過させておいてドレイクが背後から襲撃をかけてくるであろう作戦は、メディナ・シドニア公には想定済みであった⁷⁾。すでにフェリペ2世からの指令書にもその指摘があって注意を促してきていた。スペイン艦隊はそれに備えて鷲が翼を広げた鉄壁の守備編隊を組んで航進していたのである。このときのイギリス側の守りはどうであったか。繰り返し索敵を行っていた伝令船からの報告を受け、スペイン艦隊がリザード沖に出現した時点からの航進を逐一把握していたハワード提督は、当然のことながら敵がプリマスへ攻撃をかけるのを予測に入れていた。フランス駐在大使ベルナルディーノからはドレイク麾下の艦船が80艘でプリマスからスペインへ出撃する恐れがあり、ダンケルクではシーモア卿の東部警備艦隊が50艘でフランドルからパルマ公の出撃を阻んでいると報告がある⁸⁾。またスパイによるロンドンからの報告では、プリマスにハワードとドレイクの艦隊が160艘、乗員8000名との情報があり、ハワードの42艘とドレイクの86艘、併せて128艘とする報告もあって数字の確定が難しい。そのなかでもプリマスに捕虜になっていたドミンゴ・デ・ラゴを尋問した記録が貴重である。ドレイクの旗艦に乗船して実際に自分の目でプリマスの様子を目撃しているのだからもっとも信憑性がある。それによるとドレイクの艦隊は45艘ほどで戦

闘員は5000ばかり。6月15日にはハワード提督が40艘、戦闘員5000ほどを率いて入港してきた。ドレイクは「われわれには世界の大半を相手にして戦えるだけの勢力をもつ艦隊があると豪語していた」と言う⁹⁾。であればプリマスにいた艦船数は85艘、兵員は1万である。この数字はスペイン側の「敵は80艘ばかり」とする記録とぴったり一致する。イギリス海峡からカレー沖へ達するまでに地の利を得ているイギリス艦隊の数は、わらわらと増えて最終的には200艘ばかりにまで膨れあがるのだが、海峡の入り口であるプリマスには85艘近くが待ちかまえていたと見て間違いないだろう。ハワード提督からウオルシンガムへの報告では、これらの艦船のうち80艘ばかりを夜のうちにプリマス港から外へ曳航してすでに風上へつけたとあり、スペイン艦隊が現れた午後3時頃には残りの11艘ほどが風上へ軽々と間切って行き、その船足の軽さにスペイン側が驚嘆することになるのである¹⁰⁾。

だとすればビクトリア神父の言う「プリマスには人員も弾薬も不足で火縄銃を取る者もおらず」はまったく事実に反していることがわかる。ドレイクの艦船が40艘ほどであるのは確かだがハワードの40艘が計算に入っていない。実際には倍の80艘がいたのである。しかもドレイクが世界の大半を相手にできると豪語しているように士気は盛ん、各船が40門近くを搭載していたことを思えば大砲の数も充分にあった。浅瀬と岬に守られた自然の要塞であるプリマスへ130艘（コルーニャ出港時の数）のスペイン艦隊が突入するのはいかにも無謀である。もし敢行していれば全滅の危機にさらされる可能性も十分に想定されるきわめて危険な作戦であったと言える。神父の言うように「簡単に見えたがメディナ・シドニア公はみんなの意志に反してそのまま先へ進むことを命令した」のではない。実際にイギリス海峡へ入ればフェリペ2世が立てた机上の作戦通りにいかないのが現実である。総司令官ともなればその場の

判断にもとづいて臨機応変な作戦変更も必要であろう。だが記録からも判明しているように、あのととき無理にプリマスを攻撃していればスペイン艦隊は悲惨な敗北を被ったであろうことは間違いないのである。司令官たちも作戦の困難さを理解した上でみんなの合意にもとづいてそのまま航進することに決定したのは賢明な判断であった。

2) 「ロサリオ」号放置事件

7月31日、プリマス沖の戦闘でペドロ・デ・バルデスの旗艦「ロサリオ」が僚船「サンタ・カタリーナ」と衝突して操船不能に陥る事故があった。折からの強風のなか、荒波に阻まれて救助活動はままならなかった。しかも日没に入って動きがとれなくなり、このままでは艦隊全体を危険にさらすばかりか航進の大幅な遅れとなると判断したメディナ・シドニア公は救助を断念して前進の指令を下したのだった。この「ロサリオ」の放置事件については別稿（人文研究162集）で論じたので詳細は避けるが、ビクトリア神父は当然のこと「ロサリオ」を無慈悲に見捨てたと次のように声高に非難する。

「ドレイクがスペイン艦隊を追尾して後衛に攻撃を仕掛けた。ガレアサの1艘が包囲されて危ういところだった。ペドロ・デ・バルデスが無事にこれを救出した。しかし主樯と船尾の帆を破損して救助要請の大砲を放った。レカルデとオケンドが救援に駆けつけたがメディナ・シドニア公は放置して艦隊に合流するように命じ、彼らは意図に反してそうした。参謀長ディエゴ・フローレスの言葉に従ってオケンドの隊だけに任せてペドロを救援しなかったのも、救援に同意しなかったのも過ちである。ペドロは最後まで抵抗して捕縛され、5万ドゥカードと・・・黄金の剣などが失われた。・・・メディナ・シドニア公がこれを助けなかったこ

とはすでに述べた通りである。・・・出来るのに救援船を送らなかった。」

しかし神父が言うように、ドレイクに包囲されたガレアサをペドロ・デ・バルデスが無事に救出した事実はない。またレカルデとオケンドが事故船の救援にかけつけ、メディナ・シドニア公の命令により意図に反してこれを放置した事実はない。いかにも冷酷に「ロサリオ」を見捨てたように書き立てているが、実際には総司令官メディナ・シドニア公は荒海に漂う事故船の救助活動に万全をつくしたのである。しかしフェリペ2世から指令されている作戦の遂行を考え、また艦隊全体が危機に陥るのを避けるべく「ロサリオ」を放置せざるを得なかったのが事実である。最善の努力の末に最終的に放置せざるを得なかったのだが、その結果だけをみていかにも冷淡に見捨てたように言い立てて非難するのは正しくない。

3) ワイト島攻撃

プリマス沖を過ぎ、8月2、3、4日にかけてポートランド沖、ワイト島沖の激戦が相次いで展開された。このときのスペイン艦隊の作戦行動をビクトリア神父は次のように非難する。

「これを占領することも出来たがメディナ・シドニア公はやはりそうしなかった。先に司令官やベルテンドーナなどが激しく抗議したがフランドル軍と合流するまでは戦闘を交えてはならないとの陛下の命令を楯に許さなかった。もし陛下がその場におられたら占領を命じられたであろう。なぜならイギリスを獲得するには港を占拠しなければならないからである。イギリスには装備の悪い戦闘員が6000ほどしかいないので

ある。」「多数の司令官達の意見をどうして採用しなかったのかと尋ねると、たとえ全員は反対であろうと何事も参謀長ディエゴ・フローレスの助言に従うようにとの陛下の命令があったからそのようにしたのだと弁明した。明らかに敵を壊滅させることになるのだから、もし陛下がその場におられたら反対の命令をされたかもしれないなどとは考えなかった。」

このときのワイト島の状況はどうであったか。1588年5月のイギリス枢密院の報告によれば、すでにスペイン艦隊の襲来を予想して、もし敵が上陸するとしたらどの地点がもっとも危険であるかを推定している。膨大な範囲にわたる沿岸を守備しなければならないイギリスにとって、スペイン軍がどこに第一歩をおろすかの確定は国の生死を分ける重大にして頭の痛い問題であったのは容易に想像がつく。さまざまに議論の末、枢密院はスペインの侵略によって王国にもっとも打撃を受ける位置はワイト島であると結論づけている。ワイト島への上陸しか考えられないと言っているのである¹¹⁾。この時点でワイト島には8000名の兵士が4つに分けて駐屯していた。これだけでは少なすぎてスペインが上陸してくると阻止できないと危機感を募らせているのを見れば、当然のこと守備隊の増強が行われて守りを固めたであろう。ビクトリア神父が、イギリスには装備の悪い戦闘員が6000ほどしかいなくて「これを占領することも出来たが」とまるで赤子の腕をひねるかのように簡単に言うのはいかにもイギリスの戦力を侮った言葉である。

またフェリペ2世がその場におられたらワイト島を攻撃したかどうかの非難はまったく的はずれである。イギリス遠征の目的はフランドル駐在のパルマ公の軍勢17,000と合流してこれを安全にイギリスへ渡峡させることにあった。当然のこと想定されるイギリスの妨害を阻止するた

め、まず海峡を掃討して海上の安全を確保し、しかる後、パルマ公の軍勢渡海を警護するのが大艦隊の使命である。大艦隊の航進を敵が妨害してこない限り、途中の海域でいたずらに敵艦隊を求めてこれと戦闘を交えて戦力を消耗してはならない。フェリペ2世とその側近がエスコリアル宮で練り上げた作戦がこれであり、総司令官メディナ・シドニア公に出された指令書、命令書には「まっすぐ海峡をのぼってマーゲイト岬へ進むべし。そこでわが甥のパルマ公と合流して軍の渡海を支援するように」と繰り返し厳命されている。ただし敵が攻撃を加えてくれば万難を排して全力を尽くすべし。それ以外は敵の挑発に乗って無益な戦闘を行って勢力を削ぐことのなきようくれぐれも注意されたいと自重を促しているのである。さらにフェリペ2世からの極秘指令では、ワイト島の港へ入る場合は「東から入るのがよろしい。西よりも広い入り口である。ただしこれを実行するのは他に道のない場合に限る。しかも意図が果たせなくてマーゲイト岬から帰還するときのことである。往路ではけっして行ってはならない」と念を押している。メアリ・チューダーとの婚礼のため1554年7月12日にコルーニャを出港したフェリペ2世は、20日にワイト島を東から回り込んでサウザンプトンへ上陸した経験がある¹²⁾。そのわずかな経験を頼りにこのような助言をしているのであるが、主作戦であるパルマ公との合流を完了してマーゲイト岬から帰還するときに余力をかってワイト島を攻撃して停泊地を確保してもよろしいが、マーゲイトへ向かう途中で勝手な行動をしてはならないと幾度も厳命しているのである¹³⁾。メディナ・シドニア公もこれに答えて「敵を求めたりせずパルマ公と合流するまで航進を続けます。」と作戦指令の遵守を誓っている¹⁴⁾。さらに「貴殿のなすべきは余の命じたとおり、わが甥パルマ公と手を握るまでまっすぐに航進することである。・・・艦隊の針路を妨害するものを排除する以外になにもしてはならな

い¹⁵⁾。」と繰り返し下令しているフェリペ2世が、たとえその場にいたとしても簡単に作戦を変更して目先のワイト島を攻撃するとは考え難い。フェリペ2世の意志を受けたディエゴ・フローレスの進言もあって、いたずらにプリマスを攻撃しなかったのは先に述べたとおりである。

「メディナ・シドニア公がレカルデと共に60艘ほどで占拠できたであろう。そしてワイト島近くで停滞していた敵旗艦を拿捕できたであろう。うまく攻撃すれば風が起こって逃げるまえにこれを捕らえることができたであろうに、絶好の機会を逃したのは残念である。」

ビクトリア神父が艦船のいずれかに乗船して戦場にいたのなら、どこからこのような楽天的な見解が生じるのか疑問である。ワイト島沖の戦いはプリマス沖よりも激戦であった。スペイン艦隊がワイト島を回り込んでポーツマスへ入港するのを想定しているイギリスにしてみれば是が非でもこれを阻止しなければならない。西側のニードル水道からワイト島の背後へ侵入してくる恐れがあったが、水道には浅瀬があって熟練したパイロットがいらない限り130艘もの大艦隊が通過するのは危険である。すでに東へ進み過ぎているスペイン艦隊が、今の潮流と風向きから判断してニードル水道から侵入するのは不可能である。ひとまず安心だが残る懸念は東のソーレントからの侵入である。これを防ぐためイギリス艦隊最大級の旗艦であるフロビッシャーの「トライアンフ」麾下の艦隊が10艘ばかりでスペイン艦隊の左翼を圧迫作戦に出る。メディナ・シドニア公は糧で動けるガレアサ4艘を送ってこれと対戦するが、接近すると敵は軽快な船足を利用してさっと離れていく。驚いたことにスペインでもっとも船足の速いガレアサでも追いつけないのである。これでは得意の接舷から白兵戦へと持ち込めないうえ、強い潮流と岩礁、浅瀬が随

所に牙を剥いているので、地の利を得ないスペインにはきわめて危険であるため深追いも出来なかった。

中央部ではハワード提督の旗艦「アークロイヤル」がかなりの損傷を受けて危機に陥っていた。折からの凧にあって動けなくなったハワードは、11艘の漕艇に曳かせて戦列を離れようと懸命であった。レカルデの旗艦とレイバの旗艦も接近してきていた。メディナ・シドニア公の総旗艦「サン・マルティン」を初めとするスペイン艦隊には白兵戦に持ち込む絶好の機会であったと言える。だがこのとき東風が強く吹いて「アークロイヤル」は窮地を脱して風上へと逃げ延びてしまった。鈍重なスペイン艦船は例によって逆風をついてこれに追いつくことができない。メディナ・シドニア公はこれ以上の戦闘は無意味と判断して信号弾を放ち、東へ航進を指令したのである。

ビクトリア神父が「ワイト島近くで停滞していた敵旗艦を拿捕できたであろう」と言うのはこの時の状況を指しているに違いない。ビクトリア神父の船が混戦状況のどの位置にいたのか不明だが、「うまく攻撃すれば・・・これを捕らえることができたであろうに」との批判は酷である。メディナ・シドニア公は別としてもレカルデやレイバはスペイン艦隊随一の歴戦の勇者である。それが全力を尽くして敵旗艦を捕らえようとしたがどうにもならなかったのである。それにまたイギリス艦隊はビクトリア神父の言うほど脆弱ではなかった。エリザベス女王への書簡にドレイクが「今ほどすぐれた乗員を得た覚えがありません。勇敢な闘士を持ち、偉大な仕事を遂行するために腕と魂を捧げる覚悟の者たちです」と誇らかに述べている¹⁶⁾。おなじくハワード提督からバーリー卿ウィリアム・セシルへの書簡に「世界に船舶の数ありといえども、これほどにすぐれた船はどこにもありません。われわれは少数ではありますが、スペイン国王の艦隊が100に満たないならそれらを十分に翻弄し

てやりましょう。」その言葉通りスペイン艦隊を十分に翻弄して「羽をひとつずつむしり取っていく」ことになるのである¹⁷⁾。

4) 北海への針路

イギリス艦隊の妨害をかわしながらスペイン艦隊はフランス領カレー沖に到達した。8月6日の午後4時である。しかるに肝心のパルマ公の渡海準備が出来ていない。ダンケルクから戻ってきた伝令の報告では1週間から2週間はかかるという。またフランス領カレー市総督から使者が派遣されて、艦隊が投錨している位置は潮流が強く危険な地域であるから移動した方がいいとの助言があった。イギリス艦隊はドーバーやテムズを警戒していた艦船が続々と集結して数を増やし、スペイン艦隊から1キロ足らずの距離で追尾してくる。そのような危険な状況で130艘の大艦隊があてにならないパルマ公の軍勢を2週間も便々と待たせられるものでない。イギリス海峡へ引き返してどこかの港へ入るか、それとも北海を回ってスペインへ帰還すべきか、メディナ・シドニア公が選択を迫られていた矢先にイギリスから8艘の火船攻撃が仕掛けられた。カレー沖に停泊中の8月7日の真夜中12時30分頃であった。炎々と猛煙を噴き上げ、速い潮流と追い風に乗って接近してくる。火船は予想された攻撃であり、その手配りはしてあったのだが、羊の群れのようにまとまって停泊していたスペイン艦隊は十分に避けきれなかった。メディナ・シドニア公の指令で各船は捨錨逃避を余儀なくされた。つまり錨索を切断して各自に回避行動を取ったのである。火船の回避後はもとの位置へ集結するようにとの指令も出されていたが、早い潮流と激しい逆風のもとでそれは不可能だった。潮流の強さを考えて錨2個で停泊していたのでスペイン艦隊は300個余りの錨をカレー沖の海底に残したまま四散したのだった。

この惨事は予想される範囲内にあったと言える。スペイン艦隊を停泊させる港を事前に確保していればそこでパルマ公を待つことができた。艦隊を避難させる港を確保するについてメディナ・シドニア公は、当然の作戦として出撃以前からフェリペ2世へ訴え続けていたのである。これだけの大艦隊を動かすからには、嵐を避けたり、補修や補給を必要とするときに安心して入港できる停泊地がないのは遠征作戦としては致命的な欠陥である。しかるにフェリペ2世はメディナ・シドニア公の訴えに明確な返答をさげ、マーゲイト岬へ直進することばかりを繰り返してきた。やっと港の確保に触れた5月13日の書簡でも「艦隊を避難させ補修する港をどこかに確保する件については、・・・パルマ公の意見を入れて出来る限りもっとも近くの重要な港を確保するよう努めるべきである」と言う曖昧な指令でしかない¹⁸⁾。かりにも史上始まって以来の大艦隊を統帥している総司令官である、重要な港を確保すべく努めなければならないぐらいのことは百も承知している。問題はどこの港へ入るかである。それを事前に決定してくれない限り、130艘もの艦船が行き当たりばったり好き勝手な港へ入れるわけがない。フランス領であればそれなりの外交手続きも不可欠である。敵地のプリマス、ポーツマスには入れるはずもなかった。ワイト島を越えるとその先のフランドル沿岸は水深が浅くて大型のガレオン船は危なくて近寄れない。肝心のパルマ公からはいくら伝令を出しても返信は梨のつぶて、意見を入れたくとも相談のしようもない。進退窮まったメディナ・シドニア公は、やむえずカレー沖でパルマ公の出撃を待つことに決めたのだった。理由は簡単で、フランドルの沿岸は水深が浅くてそこから先へは進めないからである。ビクトリア神父が「メディナ・シドニア公はフランドルの港を確保することもできた。・・・だがメディナ・シドニア公はスペインへの針路を取った。・・・カレーから食料を購入した船が出港しては戻ってい

った。だから港へ入れたのは間違いないのである。」と言うのは何を根拠にしているのか理解しがたい。カレー市へ食料調達に出入りしている船はせいぜい50トン程度の軽装の荷船である。500トンや1000トンの喫水の深いガレオン船が停泊できる港でないのは誰もが承知している。

8日、午前8時、火船攻撃によってスペイン艦隊が分散したのを好機到来と見てイギリス艦隊は、メディナ・シドニア公の総旗艦に砲撃を開始、熾烈な砲撃が加えられた¹⁹⁾。この機会にスペイン艦隊を浅瀬に追い込んで全滅させる勢いであった。殷々と響く砲声が午後の3時を過ぎるまで片時もやむことなく続いた。船首を常に風上へ向けた総旗艦は、もっとも危険な後衛の位置に殿艦となって敵の猛攻を食い止めていた。左舷に17艘、右舷に7艘を迎え撃って砲煙に包まれる激戦を交えながらもメディナ・シドニア公は、迅速で的確な指令をくだしていたとバネガス艦長が記している²⁰⁾。総旗艦は300発を発射、107発を被弾、喫水線下を撃ち抜かれて浸水が激しく、帆は破れ索具はほとんどずたずたの状態であった。それでも我が身をかえり見ず、敵に包囲されて苦戦している「サン・フェリペ」と「サン・マテオ」の救援に駆けつけた。40艘ほどで包囲攻撃していた敵は総旗艦が近づくのを見て獲物を放置して逃げた。おなじく敵に包囲されて奮戦していた「サンタ・マリア」に接近してこれも救出している。

激戦の間にスペイン艦隊は潮流と追い風に乗ってダンケルクの浅瀬近くへ運ばれて行く。錨はカレー沖の海底へ残してきた。帆船に錨がなければ坂道に停めた車にブレーキがないようなもので危険なことこのうえない。危険回避の警告を発し、懸命の操船で僚船のすべてが浅瀬を無事に離れるのを見届けるまでメディナ・シドニア公の総旗艦はそこを動かなかったと言う。再度、葡萄粒のように艦隊を集結させたメディナ・シドニア公は、全艦隊を回頭させて攻撃に出ようと考えていた。しかしフ

ランドルに詳しい熟練パイロット（航海士）が言うには、風は北西の強い風で潮流も逆なうえに敵艦隊が待ちかまえているイギリス海峡へ戻るのとは不可能である。かといってこのまま進むと全艦船がゼーラント沖の浅瀬に座礁するのは必至である。オランダがフランドル沿岸の浅瀬の危険区域を示す浮標や標識を移動させたり取り払ったりして妨害しているのを計算に入れておかなければならない。熟練した航海士でもこれらの標識がなければ浅瀬の通過は難しいのである。ましてやその航海士さえいない状況に加え、錨も満足にない状態では停泊することもできない。最後の手段として北海へ抜けるしかないとの決断であった。明けて9日、総旗艦は他船とともに後衛に位置して敵船が近づくと反転してこれに向かった。しかし浅瀬に乗り上げて自滅するのを待てばいいだけのイギリスは手出しをせずじっと見守っている。水深は刻々と浅くなって6.5ファズム（7.6m）と絶望的である。ガレオン船の水線下は8m前後、座礁しなかったのが奇跡である。「みんなが希望を失い、死を覚悟したもっとも恐ろしい日であった」とルイス・デ・ミランダが述懐している²²⁾。そのときまさに奇跡が起こった。北西の風が南西へ移り、おかげでスペイン艦隊は座礁の危機をまぬがれて北へ針路をとることができたのである。これは低気圧と低気圧の間にあった高気圧の縁が東へ移動した結果による幸運であった²³⁾。

その日の午後、メディナ・シドニア公は総旗艦「サン・マルティン」船上に将官を集めて作戦会議を開いた。パルマ公の出撃がないままイギリス海峡へ引き返すか、このまま北海を抜けてスペインへ帰還するかである。ノルウェーに寄港して冬を過ごす意見もあったが、そうなればスペインを無防備の状態に放置することになる。トルコの威嚇や新大陸航路の安全はどうするのか。なによりもイギリスが隙をついて攻撃してくるだろう。天候が許せばイギリス海峡へ戻ろう。もしこのまま天候が許

さなければ、食料、飲料水の欠乏、弾薬の消耗、艦船の損傷を考慮して風に乗って北海からスペインへ戻ろう。会議は衆議一決した。提督レカルデも司令官レイバにしても百戦の将であれば、今のスペイン艦隊の状態でイギリス海峡へ戻るのとは不可能だと承知である。待機しているイギリス艦隊の格好の餌食にされてしまう。イギリス海峡へ引き返す意見を口にしたのは、あくまでも記録のための発言、フェリペ2世の目にとまることを意識した主張だったと思われる。北北西の風はますます強まりスペイン艦隊はさらに北へと航進を続けた。そのすぐ後ろからハワード、ドレイクなどのイギリス艦隊の精鋭がびたりと追尾してくる。だがスペイン艦隊が転頭して迎撃態勢をとるとすっと離れていく。実はイギリス艦隊はすでに早い時点から弾薬を消耗し尽くして砲撃ができなかったのだが、スペイン側にそれをさとられないように平静を装って追跡を続けていたのである²⁴⁾。こうしてスペインへ辿り着くまでの2ヶ月近く、食料を半減、水を切りつめ、病人が続出する苦難の航海が始まったのである。

ともあれ天候が許すこともなく、そのまま北海への針路を取ったのは作戦会議の決定であってメディナ・シドニア公の独断ではなかった。そのままフランドルの港へ入ってパルマ公の到着を待つことができたなら、スペイン王国の艦隊をあずかる総司令官メディナ・シドニア公にとってどれほどの幸せであったことか。神父の言う「陛下とスペインへの使命を果たせず、名誉を失って帰国するよりもイギリスへ引き返すべきだと司令官達は主張した。それを望まないメディナ・シドニア公は80艘を行くままにさせてスペイン艦隊から離れていった。・・・沿岸に多数ある河口に小船を送ることもしなかったし、カレー沿岸に多数あるフランドルの港へ入ってパルマ公の到着を待つこともしなかった」とは根拠のない非難であり暴論にも近い。ましてや80艘を行くままにさせた事実

はない。帰路についたスペイン艦隊は編成を組んで総旗艦の航跡を追うように厳命されていた。少なくともスコットランドを回って8月20日に北緯60度地点に達した時点で110艘であった。それから一月以上に渡って強風と荒波に翻弄され続けるのであるが、24日、北緯58度の地点で強風に襲われ、ついに耐えきれなくなってレカルデ隊の15艘が隊列を離れた。それから10日を経過した9月3日には90艘が固まって進んでいるとフェリペ2世に報告している。最終的には9月17日、コルーニャを間近にした北緯45度で不幸にして500年来の嵐に遭遇して11艘だけが残された。それまではメディナ・シドニア公の厳命によって整然と編隊を組んで航進していたし、少なくともその努力をしていたと言えるのである²⁵⁾。命令を無視して2マイルほど先へ勝手に進んでいた船の艦長を処刑し、帆桁に吊して艦隊を巡らせた過酷な処置からもそれが分かるだろう。

5) メディナ・シドニア公は臆病

しかしビクトリア神父はなおもシドニア公が臆病者だと言い募る。「イギリス艦隊はあえて白兵戦をしようとはしなかった。なぜならイギリスの安全は艦隊を維持しておくことにかかっているから接近戦はしないようにと女王から命令されているからであった。スペイン艦隊は接舷しようとした。しかしメディナ・シドニア公は病気でしかも臆病であったから白兵戦を避けようと言われている。」「出来るのにイギリスへ上陸して敵を制圧することをせず、フランドルの港へ入ってそこで陛下の命令通りパルマ公の準備を待つこともしなかった。」「イギリス海峡へ戻るには逆風だからとスコットランド方向へ針路を取ったのを非難する者もある。しかしイギリスへ上陸して時間を稼いで準備を整えることが出来たのはあきらかである。・・・フランドルで補修と補給ができた

のに、そして司令官たちは名誉と名声と命と健康をもって意気揚々と出撃出来たのに、メディナ・シドニア公は針路をスペインへ取った。」「これほど臆病な総司令官はいない。論争になると隠れてしまい、船を彼らに任せたままにしたからである。」「メディナ・シドニア公は航海士に旗艦を常に戦闘の危険から遠ざけておくようにと命令していたと言う。実際にそのようにしていたのだから信憑性はある。逃げていく敵からも逃げるぐらいだったのだから・・・」「浅瀬の近くにあつて、臆病なメディナ・シドニア公は、隊長達はそう呼んでいるが、すっかり恐怖に怖じ気づいて、これでもうおしまいだと観念し、敵に降伏しようとしてすでに連絡艇を派遣するところだった。先の司令官達が反対し、風が起こつて艦隊をスコットランド方向へ運び、フランドル沿岸に座礁をまぬがれた。」

メディナ・シドニア公にとってこれほど侮辱に満ちた、しかも事実反する不名誉な中傷はあるまい。メディナ・シドニア公がいつ白兵戦を避けようとしたか、いつ論争になると隠れたか、いつ敵から逃げたか、いつ船をひとまかせにしたか、いつ総旗艦を戦闘の危険から遠ざけたか。すでにパルマ公が1586年4月20日にフェリペ2世に「当地には大規模の艦隊を集結させる港もないし、安全を確保する停泊地もない」と述べている²⁶⁾。しかるに「フランドルで補修と補給ができたのに」とは何を根拠に言うのだろうか。フランドルに停泊地がありさえすればカレー沖の火船攻撃で四散する悲劇は起こらなかつた。もし補修できる港がフランドルにあったのならスペイン艦隊にとってそれほどありがたいことはない。なにも北海へ抜けて幽霊船のようになって帰還する必要はなかつたのである。また海戦体験を持たないエリザベス女王に具体的な戦略の浮かぶはずもなく、スペイン艦隊との作戦行動はハワードとドレイク

の判断にまかせているのであって、接近戦をしないようにと言うような詳細な指令を出すはずもなかった²⁷⁾。イギリスは当初から遠距離からの砲撃によってスペイン艦隊を牽制する作戦であり、白兵戦用の戦闘員を乗せていなかった。これに反して接舷して白兵戦に持ち込む従来の戦法を取るスペインは艦船に兵士を満載していた。メディナ・シドニア公は、白兵戦に持ち込まない限りスペイン艦隊に勝ち目はないともより承知である。だから戦闘の場では鉄鉤をかけて敵船を引き寄せて接舷し、白兵戦に持ち込もうと懸命であった。しかしイギリス艦船は射程距離の長いカルバリン砲を射かけてくるだけである。スペイン艦船が搭載しているカノン砲や攻城砲の弾丸は敵に届かない。混戦に乗じて接近できたとしても細身で軽快なイギリス艦船は身軽に反転して風上へと逃げていく。戦闘員と食料を満載した鈍重なスペイン船はこれに追いつけずに取り逃がしてしまうのだった。彼我の作戦の相違である。イギリス側がまったく接近してこないのも、もしや女王陛下から白兵戦を厳禁されているのではないかとスペインが疑っただけのことである。ましてやメディナ・シドニア公が臆病ゆえに白兵戦を避けた証拠はどこにもない。むしろ常に最も危険な激戦地へと総旗艦を進めながらも接近戦に持ち込めずに切齒扼腕している姿があるばかりである。これは航海日誌を初めとするあらゆる報告記録に書き留められている事実である。

「論争になると隠れてしまい、船を彼らに任せたままにしていたからである」とは何を証拠にこう言うのか分からない。コルーニャ出撃の時からプリマス沖、ワイト島、カレー沖そして帰路につく決定に至るまでメディナ・シドニア公は、重要な場面で必ず作戦会議を開いて経験豊かな将官の意見を求めている。他者の意見に耳を傾け、もって自己の経験不足を補うだけの度量のあった人物だと言われている。「旗艦を常に戦闘の危険から遠ざけておくように」に至ってはあきれるばかりである。

総旗艦が常にもっとも危険な位置に率先して入り込み、危機に陥った多数の僚船の救助に身を挺して奮闘してきたのはあらゆる記録に詳しく報告されている事実である。

もっとも身近にいたバネガス艦長は言う。「火船攻撃の夜、すぐ近くにきた火船に大砲が仕掛けられているかも知れないので船を離れて身の安全を図るようにメディナ・シドニア公に進言するものがあつたと言う。メディナ・シドニア公はそれをいさぎよしとしなかった。眼前の困難に対峙して慎重に勇気をもって乗り越え、艦隊が火船からの被害を回避すべく指令を下していた。』²⁸⁾ ビクトリア神父とはまったく逆の報告である。「すっかり恐怖に怖じ気づいて・・・敵に降伏しようとしてすでに連絡艇を派遣するところだった」と言うのが真実であるなら、メディナ・シドニア公は総司令官として最低であると言わねばならない。だがこれもまたバネガス艦長の報告だが「命が惜しければ敵と和睦すべきだと進言する者があつた。メディナ・シドニア公は・・・それには耳を貸さず、これ以上言うなと命じた」とある。遠く離れた位置から悪意にも似た冷笑を浮かべているビクトリア神父の言葉を信じるか、絶えず身近にいたバネガス艦長の報告を信じるか。イギリス側の証言によれば「戦闘は朝の9時から6時まで続いた。その間にスペイン艦隊は北北東と北東へ航進して互いに編成を維持していた。とても見事な編隊であつたと言えます。あれに攻撃を加えて被害を与えるのは困難でありました」とある²⁹⁾。激戦の渦中であつたウインター卿が称賛しているのである。スペイン艦隊が見事に隊形を維持してイギリス艦隊に対峙していた事実がわかるであろう。総司令官メディナ・シドニア公が恐怖に怖じ気づき、指揮をひとまかせにして自分は敵に降伏する事ばかりを考えていたはずがないのである。

6) フェリペ2世の不興

万全の装備を調べ、スペインの威信をかけて派遣した遠征艦隊が無惨な姿をさらして帰還したのだから、フェリペ2世の立腹は相当のものであったはずだとビクトリア神父は想像したらしい。次のように言い立てる。

「陛下は、多数の勇敢な貴族や兵士を捕虜や死亡するままに放置して逃げてきたメディナ・シドニア公にご立腹であるので気かけられないのは当然である。・・・不始末をしでかしたメディナ・シドニア公に陛下はまったく見向きもなさらない。」「この強大な艦隊は、一般に言われるように、司令官の臆病と周囲の参謀の無能のせいで崩壊した。陛下はこれをよしとせず、耳を貸さず会うこともなかった。」「メディナ・シドニア公は首都へ上洛したいと申し入れたとき国王はそれにはおよばないから帰郷するようにと命じている。」

メディナ・シドニア公は担架に乗せられてサンタンデルへ上陸し、総旗艦「サン・マルティン」は僚船23艘と共に風に運ばれて翌日の9月23日に隣のラレド港へ入った。最終的にカンタブリア海沿岸の諸港へ入った艦船の数字は65艘あまり。死者は9千ぐらいと計算されている。その半数がアイルランドとスコットランドで殺害されたがこれについてイギリスの資料は何も語っていない。こうして遠征作戦に失敗した臆病な総司令官であるからフェリペ2世の勘気に触れて見向きもされなかったとはいかにもありそうに思わせるが、実はまったく逆である。一般の兵士たちとおなじように20日間にもわたって下痢と熱病に苦しめられ、サンタンデルへ担架で陸揚げされたメディナ・シドニア公から國務長官への報告では「衰弱のあまり自分で筆をもつこともままならず

動くこともできません」と言う現状であった³⁰⁾。フェリペ2世には「疲弊困憊して到着し、何を理解しようにも気力のないまま寝床に伏せております。慈悲深い陛下の許しを得ることができると信じます」と訴え、領地サンルカルへ戻る許可を申請している³¹⁾。メディナ・シドニア公の健康状態を裏付けるようにペドロ・ココ・カルデロン事務長が「メディナ・シドニア公は健康がすぐれず、精神力だけで寝床に横たわっておられ、大変な努力と配慮で乗員を励ましておられる」とフェリペ2世へ報告している³²⁾。医師の診断からもメディナ・シドニア公の病気は予断を許さぬ状況にあり、快復に一ヶ月を要したことからもそれは間違いないところであろう。これに対してフェリペ2世は腹立ちのあまりに耳を貸さず、見向きもしなかったと決めつけるのはとんでもない過ちである。もともとスペイン艦隊の総指揮をメディナ・シドニア公に託するにあたってフェリペ2世は「神に奉仕するかくも壮大なる作戦計画を貴殿において他の者の手に委ねることはできないと考える。貴殿を信頼しているし、貴殿の体験と奉仕の気持ちを信頼している」と4月1日の書簡で述べている³³⁾。詳細は省くが他にもフェリペ2世からの書簡の随所にメディナ・シドニア公への絶大な信頼が述べられているのである。それでは、遠征が失敗に終わった時点で手のひらを返したように無慈悲にかつ邪険に接するようになったのかと言うとそれはない。国王陛下はメディナ・シドニア公の労をねぎらって言う。「貴殿の健康がすぐれないのは気がかりである。一刻も早い回復を願っているので養生に専念され、艦隊の職務に復帰されたい。」「もっとも気がかりなひとつは貴殿の健康である。・・・神のおかげで貴殿が健康を快復して現場に復帰するまでの間、貴殿の命じた人物が指令を実行に移すであろう。」³⁴⁾ ビクトリア神父にしてみれば驚くべきことであろうが、フェリペ2世はメディナ・シドニア公の健康をしきりに気遣うばかりか、艦隊総司令官の

職を解任する意図すらないのがわかる。そして9月29日の国王からの書簡では「健康を損なっておられる由、遺憾である。・・・その寒い土地で冬を越すのは貴殿の快復に不都合であるから、すぐにも故郷へ戻って鋭気を養いたいと申されるが、余もそれがよろしかろうと思う³⁵⁾。」メディナ・シドニア公は温暖なカディス近郊を領土とする公爵である。そこに生まれ育ってきた。冬のサンタンデルの寒さが病身には耐え難いのである。それを充分に承知のフェリペ2世も暖かい土地への帰郷をすすめている。このように、敗残の将となったメディナ・シドニア公の労をねぎらい健康を案じる配慮こそあれ、フェリペ2世の数ある書簡ならびに関連書類のどこを見てもメディナ・シドニア公を叱責または批判する言葉はひとつも見あたらない。スペイン艦隊総司令官の地位と年間2万ドゥカードの俸給もそのままであった。

IV.

ビクトリア神父はなおも執拗に繰り返す。

「これらの悲劇はすべてメディナ・シドニア公がイギリスを占拠してそこに要塞を築くことをせずに帰還したことにある。そうしようと思えばできたのである。なぜなら壮大な艦隊と多数の勇敢な兵士を引き連れていたのだし、イギリス兵は野卑で役立たず、しかも少数しかいなかったのは確実なのだから。」

すでに述べてきた事柄から、この非難がもはや反証にも値しない暴論であることがわかるだろう。スペイン大艦隊を迎えて臨戦態勢に入ったイギリスが便々と手をこまねいて動向を眺めていたわけではない。イングランドの各地から召集された兵士約20,000がレスター伯の隷下にエ

セックスとケントで塹壕に待機していた。サセックス、サウザンプトン、ドーセット、コーンウォールなどの城塞はすでに装備の強化が図られて万全の防備態勢を取っていた。テムズ河防衛の拠点であるティルブリーには7月までに10,000が到着していたし、河口からドーバー海峡にかけてはシーモア麾下の艦隊40艘が警備にあたっている³⁶⁾。実際、1588年1月末の書簡でパルマ公は「イングランドの不意をつくにしても30,000、武装して待ちかまえていれば海と陸とで戦闘があるから50,000でも足りない」と述べている³⁷⁾。いくらメディナ・シドニア公が130艘の艦隊と2万近い勇敢な兵士を引き連れていたとしても、「野卑で役立たずなイギリス兵」を楽々と蹴散らして占拠し、そこに要塞を築けるような楽観的な状況でないのは明らかである。

ビクトリア神父の関心はメディナ・シドニア公の頭髪にまでおよぶ。曰く「メディナ・シドニア公の髪は出発時には黒々としていたが帰還したときは白髪が増えていた。恐怖のせいである。」こうなるともう嘖飯ものである。遠征から戻ると白髪になっていたとの噂は確かにある。常人の体験しえない過酷な戦闘航海を経てきたのだから白髪ぐらいは増えたかも知れない。だがこれはあくまでも噂であって、出撃前と帰還後の白髪の量を比べた人間がいるはずもない。ましてやこれを恐怖のせいであると決めつけるのはどうであろうか。ビクトリア神父は、メディナ・シドニア公をどこまでも恐怖にかられた臆病者と決めつけなければ気が済まないのである。

スペイン艦隊総司令官メディナ・シドニア公が臆病者であったとする非難はドミニコ会士ビクトリア神父の覚え書きから始まった。しかも事実を踏まえない、想像だけによる粗雑な中傷、悪口、罵詈雑言の類である。事実を無視した勝手な思い入れと兵士からの流言、噂を書き留めてメディナ・シドニア公を非難中傷しているのである。しかし作戦遂行中

に絶えず周囲を固めていた歴戦の司令官たちから総司令官を無知無能、臆病者呼ばわりする言葉は聞かれない。参謀のボバディーリャは「いかなる指揮官といえどもこれほどのことを成し得なかった」と述べている。またミゲル・デ・オケンドなどはメディナ・シドニア公の努力と尽力を称える書簡をフェリペ2世へコルーニャから認めている³⁸⁾。メディナ・シドニア公が総司令官に選任されたときレイバ、レカルデ、オケンドなどの将官たちでそれに不服を漏らす者は誰もいなかった。ベネチア大使リッポマノは「この貴族はスペイン随一の公爵である。素晴らしい性格で誰からも愛されている。慎重で勇敢なばかりか、きわめて善良で温厚な人物である」と祖国へ報告を送っている。パルマ公にしても「陛下の選択は素晴らしい」と述べているほどである³⁹⁾。国王フェリペ2世がメディナ・シドニア公をスペイン艦隊総司令官に選んだのは、きわめて妥当な人選であると誰もが思っていたのである。もしそのメディナ・シドニア公がビクトリア神父の言うようにどうしようもないほどに無能で臆病者であったのなら、絶対の信頼を寄せて公爵を選んだフェリペ2世の無能さが問われることになりはしないだろうか。フェリペ2世の作戦指令どおりにカレー沖にまでスペイン艦隊を運んだ功績はメディナ・シドニア公のものである。これは認めねばならない。根拠のない憶測にもとずいて軽薄な非難を流布させ、メディナ・シドニア公の名誉を必要以上に貶めたビクトリア神父の責任は決して軽いものではない。

注

- 1) 艦隊に関する船舶数、兵員数などには諸説があり煩雑になるので詳細な数字をあげるのはさけた。たとえばスペイン艦隊は141艘で出撃したがイギリス海峡を登ったのは122艘だけで、そのうち19艘が戦列離脱をして最終的には117艘がイギリス艦隊の180艘と対峙したとする極端な説もある。*England, Spain and the Gran Armada 1588-1604*, John Donald Publishers Ltd, Edinburgh, *Atlantic Shipping in Sixteenth-Century Spain and the 1588 Ar-*

mada, Jose Luis Casado Soto. pp. 95-133.

帰還した人員についても数の確定は難しい。Manuel Gracia Rivas は帰還者 13,399 名、死亡 12,297 名 (47.8%) と計算している。おおよその目安とはなるが推測概算でしかない。*England, Spain and the Gran Armada 1588-1604*, John Donald Publishers Ltd, Edinburgh, *The Medical Service of the Gran Armada*, pp. 196-215.

- 2) 1580 年にスペインはポルトガルを併合したのでリスボンが出撃港に選ばれた。
- 3) スペイン艦隊は単に「艦隊」あるいは「大艦隊」とよばれた。“INVINCIBLE”の呼称は使わなかった。*The Spanish Armada*, Colin Martin and Geoffrey Parker Mandolin. 1999.
- 4) 宮廷からメディナ・シドニア公への指令書に、新大陸へ向かうとの口実で兵員を急遽ガレオン船に乗船させたとある。*ARCHIVO HISTORICO ESPAÑOL, La Armada Invencible*, 83.

84. Enrique Herrera Oria, S.,J., 1587-1589.

1586 年の徴募の時点では、海賊の威嚇を排除し、その潰滅と懲罰をくだすための沿岸警備が目的とされ、艦隊編成の真の意図は隠されていた。*Los tercios de la Gran Armada (1587-1588)*, p. 29, Manuel Gracia Rivas, 1986. Editorial Naval.

サンタ・クルス侯の死去ともなってメディナ・シドニア公へ総司令官を任命するときの指令書にもフェリペ 2 世は目的地を新大陸とするように記している。*LA ARMADA INVENCIBLE*, 185, Cesáreo Fernandez Duro, 1885, Madrid.

- 5) 以降のドミニコ会士の覚え書きはすべて *LA ARMADA INVENCIBLE*, Cesáreo Fernandez Duro, 1885, Madrid. 186 から順不同の抜粋である。
- 6) 「まっすぐマーゲイト岬を目指すべし」との指令は *LA ARMADA INVENCIBLE*, 95, *ARCHIVO HISTORICO ESPAÑOL*, 77 に見られる。
- 7) *LA ARMADA INVENCIBLE*, 113. *Calender of Letters and State Papers, Vol. IV. Elizabeth, 1587-1603*. 107. Martin A.S. Hume, London, 1899.
- 8) プリマスの艦船数についての報告は *Calender of Letters and State Papers, Vol. IV. Elizabeth, 1587-1603*. Martin A.S. Hume, London, 1899 の 284, 285, 297, 300, 307, 345, 353 で緊迫した状況のもとで矢継ぎ早に情報が伝えられているが、多少数字にばらつきが見られる。
- 9) *ARCHIVO HISTORICO ESPAÑOL*, 1588 年 7 月。
- 10) 「提督からウォルシンガムへ」、7 月 21 日 (7/31)、*THE GREAT ENTERPRISE, The History of the spanish armada*, Stephen Usherwood, Bell & Hyman, London, 1982.
- 11) 枢密院報告は続けて「われわれは新規の兵員の補充と充分な補給を行っている。油断無くしっかりと配置についていれば、主力部隊が向かってこないかぎり、僅かな人員でも上陸を

阻止するのは難しくないと記している。*THE GREAT ENTERPRISE*, 1588年5月。

- 12) *Calender of Letters, Despatches and State Papers. vol. XII MARY, January-July 1554.* London. 1949. 7/12, 7/20
- 13) *LA ARMADA INVENCIBLE*, 95. 1588年4月初旬。
- 14) *LA ARMADA INVENCIBLE*, 113.
- 15) *Calender of Letters and State Papers*, 107. 1588年5月21日。
- 16) 「フランシス・ドレイクからエリザベスI世へ」*THE GREAT ENTERPRISE*, 1588. 4. 13
- 17) 「ハワード提督からバーリー卿ウイリアム・セシルへ」*THE GREAT ENTERPRISE*, 1588. 2. 28
- 18) 「フェリペ2世からメディナ・シドニア公へ」1588年5月13日、*LA ARMADA INVENCIBLE*, 104.
- 19) 「コルーニャを出てから起こった真実の報告」*LA ARMADA INVENCIBLE*, 171.
- 20) 「1588年のイギリス遠征で陸下の艦隊に起こった事柄の報告。総司令官はメディナ・シドニア公、コルーニャ出港から帰還まで、旗艦 *Alonso Vanegas* 艦長筆」*LA ARMADA INVENCIBLE*, 185.
- 21) 「メディナ・シドニア公によるイギリス遠征のコルーニャを出航以来の航海日誌」*LA ARMADA INVENCIBLE*, 165. *Calender of Letters, Despatches and State Papers. vol. XII*, 402.
- 22) *LA ARMADA INVENCIBLE*, 169.
- 23) *A Meteorological Study of July to October 1588: The Spanish Armada Storms.* Fig. 10の天気図、K.S. Douglas, H.H. Lamb, C. Loader, University of East Anglia, Norwich, 1978.
- 24) ハワード提督やドレイクなどからウオルシinghamへの書簡には決まって砲弾補充の要請が記されている。「シーモアから枢密院へ」7月23日(8/3)、「ドレイクからウオルシinghamへ」7月29日(8/9)、*THE GREAT ENTERPRISE*, p. 101, p. 105
- 25) 最終的には9月14日、北緯45度で500年来の嵐に遭遇して11艘の集団となる。*The Spanish Armada*, p. 215, Felipe Fernandez-Armesto, Oxford University Press, 1988
- 26) *Los Medios Navales de Alejandro Farnesio (1587-1588)*, Fernando Riano Lozano, Ed. Naval, Madrid, 1989.
- 27) *Calender of Letters, Despatches and State Papers. vol. XII*, 353.
- 28) *LA ARMADA INVENCIBLE*, 185.

- 29) 「ウインターからウオルシンガムへ」8月1日。THE GREAT ENTERPRISE. p. 109
- 30) 「メディナ・シドニア公からイディアケスへ報告」LA ARMADA INVENCIBLE, 174.
- 31) 「メディナ・シドニア公からフェリペ2世へ」ARCHIVO HISTORICO ESPAÑOL, 1588. 9. 25
- 32) 「ペドロ・ココ・カルデロンからフェリペ2世へ」LA ARMADA INVENCIBLE, 156.
- 33) 「フェリペ2世からメディナ・シドニア公へ」ARCHIVO HISTORICO ESPAÑOL, 1588. 3. 22
- 34) LA ARMADA INVENCIBLE, 175.
- 35) LA ARMADA INVENCIBLE, 176.
- 36) 「イギリスからの報告」、Calender of Letters, Despatches and State Papers. vol. XII, 381.
 さらに注目すべきはワイト島を中心に設置された警戒信号システムであろう。点火する光の数で警戒の度合いが示されてただちに内陸部へ伝わるように定められていた。リザード岬を望んだ時点で陸地に狼煙が上がるのをスペイン艦隊から確認されているのもそのひとつである。
- 37) *Los Medios Navales de Alejandro Farnesio (1587-1588)*, Fernando Riano Lozano, Ed. Naval, Madrid, 1989.
- 38) *The Spanish Armada*, Colin Martin and Geoffrey Paker, Mandolin, 1999.
 「ミゲル・デ・オケンドからフェリペ2世へ」1588. 7. 15、ARCHIVO HISTORICO ESPAÑOL, 128.
- 39) *The Enterpraise of England, The Spanish Armada*, p. 48, p. 49, Roger Whiting, Alan Sutton, 1988.